
神風怪盗ジャンヌ 第零章地上に舞い降りた天使

工藤 太一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神風怪盗ジャンヌ 第零章地上に舞い降りた天使

【Nコード】

N6837Q

【作者名】

工藤 太一

【あらすじ】

日下部まろんはマンションで1人暮らしをする女の子。

彼女は、中学の卒業式の夜に不思議な妖精のような生き物と出会う。彼女は準天使のフィン・フィッシュ。悪魔を倒すためにジャンヌ・ダルクの生まれ変わりのまろんを探していた。世界の危機を救うために彼女は怪盗ジャンヌとなって悪魔と戦うことに決意する。

（前書き）

この小説は物語の主人公の目下部まるんちゃんが可憐な準天使フィ
ンちゃんと出会ったときで、主要ヒーローのシンドバッドこと名古屋
稚空くんと出会う前のお話です。

未熟で多少時間がかかりますが、精一杯頑張ります。

桃栗中学校卒業式

「日下部まるくん。」

「はい。」

名前を呼ばれた背まである茶色いロングヘアのツーサイドアップの少女は舞台に立って校長先生から卒業証書を貰ってお辞儀をしました。

彼女は日下部まるん。今日で桃栗中学を卒業しました。彼女は幼稚園の頃から両親と離れて暮らしています。そんな彼女をだいじにしているのは……。

「東大寺都くん。」

「はい。」

背まである長い黒髪の少女は卒業証書を受け取り、お辞儀をしました。

名前は東大寺都。まるんの幼稚園の頃からの幼馴染です。彼女は当初はかなりのツツパリで友達はできなかったのですが、まるんと出会ってから素直な性質になってきました。

生徒達は、式を済ませて記念写真を撮ることになりました。

「まるーん。一緒に写真をとろう。」

「うん。わかった。」

クラスメートに促されてまるんはクラスの少人数と写真を撮りました。中には、都も混ざっています。

卒業式から帰ってきたまるんはマンションの自分の部屋のメールボックスを見ました。彼女は朝と夕方にメールボックスを見ては両親の手紙がきているかどうか確認します。でも、両親の手紙はありません。

「はー、今日も来てないか。」

まろんはため息をつくと自分の部屋に帰りました。

帰宅したまろんは、家中に電気もつけずにセーラー服から白いドレスに着替えて自分のベッドに転がり込みました。

「はー、お父さんとお母さん今頃どうしているんだろう。」

まろんは、机の上の写真を見ました。そこには、幼い自分と優しいそうな両親が移っています。彼女の両親はまろんが幼稚園の入るまでは仲良しでした。両親の思い出のある遊園地に行ったり、商店街のレストランで食事をしたり、お買い物したりしました。それが彼女が幼稚園の時に喧嘩をしてしまいとうとうそれぞれの国に家出してしまいました。それから彼女は母の知り合いに育ててもらっていたのでした。ちなみに現在は元の実家で1人暮らしをしています。まろんはちよつと、気晴らしに散歩にでかけました。

まろんは両親の思い出のある遊園地に行きました。此処にければほつとすると思ったからです。

「はー、此処にいくると気持ちが落ち着くわ。」

まろんは両親が出て行ってからいつも友達と此処で遊んでいます。特にメリーゴーランドは最高の思い出です。

まろんはベンチに座って星空を眺めました。その時、まろんの前に可愛い妖精のような少女がゆりの花を持って話しかけました。

「こんにちわ。日下部まろん。」

「え、誰？」

その少女は背に白鳥のような羽を生やして、緑のショートヘアを持っています。

「私は、準天使のフィン・フィッシュ。初めましてまろん、貴方に告げることがあるの。」

まろんはフィンを連れて帰宅しました。

「えーっと、フィン・フィッシュだったかな？」

「フィンて呼んで。実はね、今世界が闇に覆われようとしているのよ。」

「どういうこと？実はね、悪魔は心の美しい人の大事な芸術品に取り付いてその持ち主を操ろうとしているんだよ。魔王はその人の美しい心をとろうとしているのよ。第一そのままにしておいたら悪魔に取り付かれた人は死んじゃうんだよ。」

「それで如何するの？」

「簡単よ。」

フィンは額の飾りからオパールがはめ込まれた十字架とスイッチのようなものを取り出しました。まろんはその二つを手に取りました。

「これは？」

「ロザリオとプティクレア。ロザリオは変身道具で、プティクレアはいろんな道具を出したり、悪魔の反応を示すこともできるんだよ。」

「変身って？」

「ジャンヌだよ。ジャンヌ・ダルクは神様に守られてイギリス兵と勇敢に戦ったのに、悪魔のせいで火あぶりになちゃったんだ。それでまろんがジャンヌの意志をついで世界を守るんだよ。ジャンヌダルクの生まれ変わりであるまろんにしか出来ないんだよ。」

「私が、フランスの英雄の生まれ変わり？」

「そうだよ。まろんがジャンヌになって、美術品に潜む悪魔をプティ・クレアの中のピンで悪魔をチェック・メイトするんだよ。悪魔は取り付いている美術品ごとチェス駒になるんだ。」

「それでチェス駒はどうするの？」

「回収するの。そのチェス駒は神様のパワー増幅の為にとっておくから。」

「数え切れない悪魔全部を封印して神様に捧げるの。」

「そういうこと、私は神様の命令で地上に降りてきたんだ。そうすれば、御褒美に私を正天使にしてくれるんだ。」

「話は判ったけど、私のしていることは泥棒じゃない。ジャンヌなんてなれない。夜が怖い。私は独りぼっち。」

まろんは膝に顔を埋めます。まろんは夜と孤独が嫌いです。フィンはまろんを励まします。

「何言ってるの！？ まろんにはフィンがいるじゃない！ フィンはいっただってまろんと一緒にだよ！」

「フィン。」

「そういえば、まろんに家族はいないの。だったら今日からフィンが家族だよ。」

「家族？」

「そう、だから私を信じて。神様はいっただってまろんを見守ってるよ。」

「・・・判った・・・」

「それじゃ、待ってて。準備をしてくる〜」

フィンは窓から飛んでいってしまいました。

「ちよつと、待ってよ」

！フィン

！

まろんは追いかけるがフィンの姿はもういません。

「行っちゃった・・・」

準備とは、どんな準備でしょうか。

まろんや都が通っていた中学校の近くに博物館があります。館長は誰にでも親切で弱い人を見ると自分の骨董品を見せてくれます。骨董品はどれも館長にとっては宝物でそのうちの1つの埴輪は町の人に幸運をよせるほど大事なものです。

「もうすぐ、わたしが発表する第縄文展が開催される。そしてこの埴輪は桃栗町の人々を笑顔をもたらしてくれる。取り替えるのはとても勿体無い。」

急に埴輪の目から黒いオーラが出てしまい、館長はそのオーラに取り込まれて人が変わってしまいました。その様子を見ていたフィンは額の飾りから一枚の紙を出しました。その館長の頭の上に落

としてまるんのマンションに引き返します。

家では、まるんがクリームシチューを作っています。今日からフィンも一緒だからいつもよりちょっと多めに作っています。

そこへフィンが帰ってきました。

「ハロー！マローン！」

「お帰りなさい。何してたの？」

「予告状？やっぱり泥棒をするの？」

「そういうこと、悪魔だけ取り除くことは不可能だから盗むってことになったの。」

「怪盗ってことは、警察もくるんでしょう。これは、厄介だね。」

「何、言ってるの？予告では、今日の九時までにいなくちゃいけないのよ。」

「なんですって~~~~~！九時までってことは~~~~~！」

まるんは時計をみるともう7時半です。あと、1時間半しかありません。

「ご飯を食べたら出発よ　　！」

二人は大急ぎでご飯を食べて後片付けして出かけました。

まるんはフィンの指示に従って桃栗中学に来ました。目的地まで近いからです。

「なるほど、博物館の埴輪に悪魔が取り付いていたんだわ。」

「それを封印すればいいのよ。プティクレアとロザリオは持ったわね？」

「ええ。」

彼女はちゃんとフィンにもらった例のロザリオとプティクレアを持っています。

「このプティクレアを頼りに悪魔を探せばいいのね。」

「そういうこと。行くわよ。」

フィンは額の宝石から光をロザリオに向けて放ちます。変身するには彼女の力が必要です。

「さあ、まるん変身よ。」

まるんはロザリオに祈りを込めます。

「ジャンヌ・ダルクよ。力を貸して……。」

まるんの体は光に包まれました。光の中から和洋折衷の衣装を纏った腰まである金髪を赤いリボンでポニーテールにした少女が表れました。

「強気に、本気。無敵に、素敵。元気に、勇氣。」

まるんは怪盗ジャンヌに変身しました。

ジャンヌは時計塔の頂上に着きました。

ジャンヌは壁に身を潜めました。下には数人の警察と警備員がいます。下手をすれば捕まってしまう恐れがあります。

「やつぱり駄目。泥棒なんて無理。」

弱気になるジャンヌをフィンは励まします。

「まるんなら絶対大丈夫！」

「本当？信じていいの？」

心配なまるんにフィンは頷きます。

「天使は嘘付かない！」

下では男性がジャンヌの予告状を読んでいます。

「『桃栗博物館の館長さんへ

今夜9時に貴方の埴輪の素顔の美しさを頂きます。

神風怪盗ジャンヌ』だってよ。変な怪盗が出てきたぜ。」

男性と一緒に長い黒髪の少女が腕組して難しい顔をしています。

「ジャンヌだか、ジャンプだか知らないけど。埴輪の笑顔も桃栗町の人たちの笑顔も守ってやる。」

「それにしても都なんでお前が俺についてきてるんだ。」

「だって、お父さん1人だと頼りないんだもん。それにアタシの夢は刑事になることだから。」

実はこの男性は東大寺氷室という刑事さんで都の父親だったので。そして少女はまるんの幼馴染の都でした。

どうやら館長が警察を寄越したそうです。そして刑事になることを夢見る都もついてきていました。

そこへ4人の個性的な男性刑事が駆けつけてきました。大柄な刑事は春田。若々しい刑事は夏田。セミショートカールの刑事は秋田。そしてサングラスが特徴な刑事は冬田と名です。

「東大寺刑事、ジャンヌとは一体何者でしょうか。」

「さあな。今回は初めてだからな。」

ジャンヌとフィンはもう博物館の前に来ていた。

「あらら、おじさまに都。そうか、都のお父さんは刑事だったんだ。」

「これは、ぐずぐずしてられないわ。行きましょう。ジャンヌ。」

「判った。」

ジャンヌはプティクレアから紐付きのソフトボールを出しました。これがリバンド・ボールです。ジャンヌはリバンド・ボールをすぐに投げました。それが都の長い髪を掠りました。髪は頂のところから離れて下に落ちてしまいました。

都は頭を押えます。髪の毛はうなじのところからぷつぷつと切られてしまいました。

「キャ !アタシの髪が

!!」

都が大騒ぎしているうちに警察と警備員が騒ぎを聞きつけて大混乱になりました。ボールは地面に付着してジャンヌはそれを辿って降りてきました。

「あらら、やちゃった。都ごめんね。」

着地したジャンヌはこそこそと警察や警備員をやすやすと通り抜

けました。

ジャンヌとフィンはうまく博物館に潜入しました。プティクレアは本当に悪魔に反応しています。

「やっぱり、こっちのほうにあるんだわ。今度、館長さんが埴輪を見せてくれるんだから。埴輪がどこにいるかも判ってんだから。」

さすが、ジャンヌ冴えてる。

プティクレアからフィンの声がありました。宝石にフィンの顔が写っている。

「何、フィン。これから声を出してるの？」

言い忘れたけど、これは私と通信もできるようになってるんだ。

「え、なんですって？どうして早く言わないの？危うくフィンを探す羽目になるところじゃないの？」

えへ、ごめんなさい。

フィンは拳で自分の頭を小突きました。

そこへ、警備員が近づいてきてジャンヌは更衣室に隠れました。

更衣室でジャンヌはフィンと連絡を取っています。

「それで、フィンは今何処よ？」

館長室よ。館長は、埴輪をジャンヌに取られないようにこっすり持ち出したのよ。

「まったく、これは潜入以外の方法がないじゃないの。」

どうしよう。」

そのとき、女性警備員の足音が遠くから響いてきました。

「まずい、女性警備員だ。どうしよう、このまま捕まったら明日の桃栗高校の高校入試にいけないよ。どうしたらいいの。」

その時、ジャンヌはあることに閃きました。近くにロープや鉄や布テープのはいったダンボールがあります。

「そうだ。」

ジャン又はダンボールから、数mもあるロープを引っ張り出してガムテープもだしてそれを片腕で胸に抱えてロッカーのドアをもう片方の腕で閉めました。

女性警備員は更衣室に入ってきました。そろそろ、仕事を終えて着替えて帰宅するところでしょう。女性はロッカーを開けました。するとジャンヌの拳が溝にあたり、女性は気を失いました。ジャンヌは素早く女性の服を剥ぎ取り着替えて、彼女を簀簀にしました。幸いロープは女性を拘束するのにちょうどいい長さでした。それからガムテープを3本引きちぎり女性の口と両目の塞いでロッカーに押し込んでドアを閉めて更衣室を後にしました。

館長室では館長が埴輪を見つめています。埴輪の目は黒く光っています。

「この埴輪は私が守る。絶対にだ。」

「ジャンヌだったら、何をしているのかしら。」

上空では、フィンが館長を見守っています。幸い天使はジャンヌの生まれ変わりのまろんしか見えませんが、それでもばれる恐れがあるので隠れることもあります。

館長室から”コンコン”とノックがします。館長は埴輪を机に置いて開けて見ると警備員の女性が立っています。

「どうしたんだね。キミはもう帰っていいんだよ。」

「そういうわけには参りません。仕事はこれからですから。」

そういうと館長の溝に拳を伸ばして気絶させました。さすがの埴輪は怒っているかのように目を吊り上げて宙に浮くと女性に襲い掛かってきました。女性は衣服を脱ぎ捨てます。服にかかったのか埴輪は動けなくなりました。その後を正体を現したジャンヌがリバンド・ボールの紐で埴輪を拘束しました。ジャンヌはプティクレアからピンを取り出して針を埴輪の向けます。

「神の名の元に、闇より生まれし悪しき者を、此处に封印せん！ チェック・メイト！」

ピンは埴輪の背に刺さり悪魔を呻きをあげながら埴輪と一緒に消滅してチェスに使う白い駒になりました。

この駒をフィンが抱えました。

「回収完了！逃げるわよ、ジャンヌ！」

「逃げましょう、フィン！」

リバンド・ボールを天井の格子に貼り付けて格子をはずして二人はその穴の中に逃げ込みました。その後、屋根から木に飛び移り自分のマンションに逃げ帰りました。そこを警察官が見ていたのと露知らずに。

「いたぞ！あれがジャンヌだ！」

ようやく、警備員が駆けつけた頃には館長が気を失って倒れていました。

「館長、館長。」

警備員に起こされた館長は目を覚ましました。

「あれ、私は一体何をしていたのだろうか・・・？」

館長は悪魔に操られていたことを覚えてはいないのです。さすがの警備員は？と不思議そうに思うのでした。

一方更衣室では女性警備員がジャンヌに征服を奪われて口や目をガムテープで塞がれて半裸で縛られてロッカーに監禁されていたところを警察に救助されて東大寺刑事に上着をかけてもらっていました。

都は長い髪を切られて、悔しくなって地たん場を踏んでいます。

「怪盗ジャンヌめ　！今度会った時は、とっ捕まえてアタシの髪の弁償をさせてやるわ　！」

「お前、長かった髪を切られたことを根に持つてるな・・・。」

東大寺刑事は呆れていました。

「当たり前でしょう！髪は女の命なんだから！」

そこへ警察官の1人が出てきました。どうやら結局ジャンヌに逃

げられてしまったようです。

「刑事、怪盗ジャンヌの特徴が判りました。」

警察官は一応ジャンヌを写真を撮ったから、特徴だけでも覚える気です。

「なるほど、この子がジャンヌか。特徴が判れば十分だ。みんな怪盗というのは時には変装だつてして盗みだつてするそうだから、絶対に気を付けるように。」

「判つてゐるわよ。今度からはトラップでもしかけようつと。」
こうしてジャンヌと都と悪魔の三つ巴が始まりました。

ジャンヌとフィンはマンシヨンの近くの木に身を潜めました。

ジャンヌは回収した白いチェス駒を眺めました。

「この駒を神様に差し出せばいいのね。」

「そういうこと。まだどこかにうじやうじやといるから全部封印してその集めたチェス駒を神様に届ければ語褒美に私は正天使になれるんだから。」

「その準天使とか正天使つて一体なんなの？」

「あれ、言つてなかったっけ？天使の形態だよ。生まれたばかりの黒天使、第2段階の準天使、第3段階の正天使、そして最高位の大天使。それがフィンたち天使の段階なんだよ。」

「えーっと、フィンが準天使つてことは、第2段階で次に変化するの第3段階か。」

「ピンポーン。」

「・・・うん・・・。なんだか知らないけどもう少し怪盗をやってみようかしら。」

「わーい！ありがとぅ、ジャンヌ！」

フィンはもう大覇者儀です。

「ところで、どうやったらジャンヌからまたまるんに戻れるのかしら？」

どうやら変身の解き方は知らなかったそうです。

「髪をまとめているリボンを解いてみて。」

「こっつ?」

ジャンヌはポニーテールにして纏めている赤いリボンを解きました。するとジャンヌの周りに光が舞い、ジャンヌはまるんになりました。

「本当だ。」

「でしょう?これからもよろしくね。神風怪盗ジャンヌ。」

「・・・うん、判った・・・。」

まるんは緊張しながら承諾しました。

翌日

“ピピピピピピピピ”

まるんはベッドの上の目覚まし時計の音で目を覚ましました。

「あふ~~~~。なんか変な夢を見ちゃった。緑の髪に天使の女の子にドロボウを頼まれてしまった・・・。」

まるんは寝ぼけつつも壁にかけてあるカレンダーを見ました。なんと今日は・・・。

「あ、そうか。今日は高校入試だったんだ・・・。」

まるんはセーラー服に着替えてその上にエプロンをつけて身支度をしませて、朝食の準備をしようと思いました。

台所では。

「ハロー!まるん、おはよう!」

フィンが待つていたのでした。

「夢じゃない・・・。現実だ・・・。」

今日からフィンがまるんの家族としての生活が始まったのです。

「今日は、例の入試だったんだって~~~~!フィン、応援してます!」

可愛くて無邪気な準天使フィンはしばらくまるんの家出居候することになりました。

桃栗高校に着いたまろんは都に逢いました。

「おはよう、都！」

「おはよう、まろん。」

都はしかめっ面で腕組をしています。髪はうなじのところで切り添えられてしました。たぶん、帰宅後母に髪を添えてもらった後でしょう。

「どうしたの？その髪？」

「ジャン又っておかしな怪盗に切られたのよ。」

「それは、大変だ。」

「ジャン又め。今度あつたら髪の毛の弁償をさせてやる。」

都は窓にむかって、決意を固めました。

「暫く、三つ巴の戦いになりそうね。」

こうして、まろんは怪盗ジャン又になって町中の美術品に潜んでいる悪魔を回収する日々が始まりました。

（後書き）

豪く時間がかかりましたがやっと完成しました。

その後、まろんちゃんも都ちゃんも高校の入試に無事受かり、途中で転校してきた名古屋稚空くんと高校生活を送ることになりました。その稚空くんは怪盗シンドバッドになって黒天使アクセス・タイムと共にジャンヌの邪魔をしますが結局はチェス駒はジャンヌが全部揃えてしまいました。そしてフィンは使命を終えて天界に帰還しました。果たして、どんな正天使になるのでしょうか。結果はアニメでご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6837q/>

神風怪盗ジャンヌ 第零章地上に舞い降りた天使

2011年10月6日20時28分発行